上空から見たモルディブの環礁は「サンゴ礁の花輪」。また、ダイバーが作るバブルのようにも見える

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

浅瀬に輪を描くギンガメアジ。島の時間を刻んでいるよう（ビヤドゥ アイランド）

夕方、餌付けで集まってきたアカエイ。まるでスケートのように水面を滑る（タージ コーラル）

砂浜に立つ案内ボード（ベリガンドゥ アイランド）

島の周囲を歩いていても、水面からたくさんの魚たちがよく見える。

私が住んでいた島は南マーレ環礁の東南に位置するBiyadoo Island（ビヤドゥ アイランド）。１周歩いて約10分程の小さな島だった。その周囲には自然のサンゴ礁で形成されたモルディブでも有数のハウスリーフを持ち、一日中スノーケリングやダイビングを楽しむことができる。ゲストによく「こんな小さな島で暮らすことができるね？」と尋ねられることがあった。確かに、小さな島での生活は単調で退屈なように思われるが、周囲に広がる海を知ることで、僕の遊び場は無限の広がりをみせた。

そして海の中へ入っていくと温かな青い水が全身にまとわりつく。水面のゆらめきの光が輪となり浅い水底で私から遠ざかっていく。

マスク越しに水中を覗いてみるとコバンアジやギンユゴイの仲間などが泳いでいる。

南の島の魚たちはのんびりとして、私のことなどあまり気にする様子がない。ツバメウオやエイ、そしてツマグロというおとなしいサメの仲間も集団で、もしくは波打ち際で泳いでいる。彼らは外敵の少ない島の浅瀬で成長し、外洋へと旅立つ時を待っている。厳しい自然の中で生きていく彼らにとって、ここはそれまでの安全なゆりかごなのだ。

サンゴが群生しているリーフエッジまで足を延ばすと水深30〜40メートルまで落ち込むドロップオフが見えてくる。潮の回りがよいこの辺りになってくると色彩豊か魚たちと出会える。なかにはピカソ・トリガーフィシュと呼ばれる、いかにも画家ピカソの描きそうな独特な色彩の魚もいる。また他の多くの魚たちも私たち人間では創造もできない色を身に纏っている。

スノーケリングを続けていると水面近くを泳いでいるオヤビッチャやスズメダイの仲間が私の行く手で、パッーと花火のように海の中に散らばって行く。パウダーブルーサージョンフィシュというインド洋の固有種である美しい魚は、時折、面白い行動を見せてくれる。どうしてその時を知るのだろうか、まるで誘い合わせたかのように1匹、また1匹と泳ぎ寄り、あっという間に50匹程の大きな玉になる。そして突然、目標を定めたかのように一斉にサンゴの表面に付いている藻の仲間などを捕食し始める。その玉は忙しく別のサンゴへと移動していく。静かな海の中でサンゴを擦る“シャキ、シャキ”という音だけが響いている。

Kagii Yasuaki in Maldives

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

インド洋の固有種、パウダーブルーサージョンフィッシュの群れ、サンゴを齧り、シャキシャキと音を立てながら行進する

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

コブの大きなナポレオンフィッシュの成魚。その存在感は誰にも負けない

海のリズムが心地よい。
モルディブの海ではいつも身近に
生命の営みを感じることができる。

もう少し深い世界を知るためにスクーバーギアを着けて旅してみる。

ドロップオフから見える限りの青い世界へゆっくりと潜降していくと、身体が無重力の世界に放り出されたような感覚になる。

やはり海の中にいるという緊張感のせいか、はじめは視野が狭い。それは高速道路をハイスピードで運転しているときの1点に視野が集中してしまうことに似ている。ゆっくりと深く呼吸を整えてみる。エバンスアンティアスやキンギョハナダイの艶やかな原色が青い水に映え、新鋭のオブジェのようなカイメンの仲間やイソギンチャクが現れてくる。

岩礁の隙間からゴンベの仲間たちが不思議そうにこちらを伺っている。水深約１５mの大きな岩の回りではムスジコショウダイが群れ、ホンソメワケベラにクリーニングされている。気がつくと私は注意深く周囲に気を払い、気持ちも幾分、穏やかになっていた。

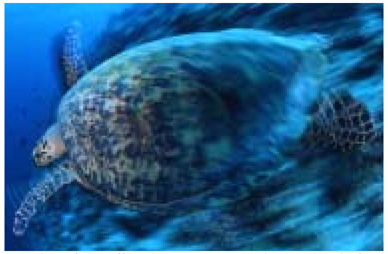
モルディブの海は大型の生物の宝庫でもある。代表的な魚のひとつはベラの仲間であるナポレオンフィシュ。正式名称はメガネモチノウオ。老成魚になると額がコブ状に突き出し、その形がフランスの古い軍隊帽を思わせるので、俗にナポレオンフィシュと呼ばれている。カスミアジを引き連れて泳いでいるのを見かけたことがあるがその姿はなかなか堂々としたもので、風格さえ感じられた。

カメもよく見かける。ベッコウの原料になったタイマイという種類だが、カメの漁を禁止しているモルディブではその個体数は圧倒的に多い。彼らは岩に付いているカイメンを食べるため、いつも岩礁に頭を突っ込み何かを探しているようだ。そんな時は私たちがいくら近づいても全く意に介せず、食事に夢中。とてもマイペースで、この海で一番のんびりしているのかもしれない。

そして最も人気があるのがオニイトマキエイ、通称マンタだ。彼らはプランクトンを捕食するおとなしい性格の持ち主だ。ダイバーの中にはこの魚に魅了されモルディブまで訪れる人も少なくない。大きさ約２～３mもあるマンタが悠然と現れ、海を飛行するような姿にはいつも心を奪われる。毎年同じ時期に帰ってくる彼らはこの海の風物詩だ。

私は海にいた時間と比例して、いくつも感動的な出会いがあった。それは誰もが共有することのできる海から贈り物だと思っている。

森のような赤や黄色やオレンジ色のソフトコーラルの群生が広がる。何百年も変わらぬ景色の中、私たちは時間を忘れ魚たちの楽園に迷い込む。


時折、素早い動きを見せるタイマイ（カメの仲間）だが、いつもはのんびりしている

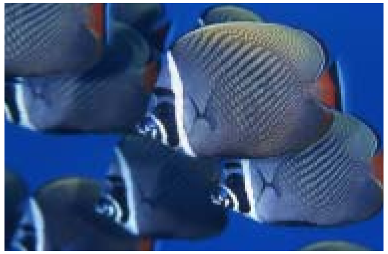
©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

クリーニングステーションでホンソメワケベラにお掃除されていたマンタ。大きな翼を広げ、まるで天を仰いでいるようだった

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

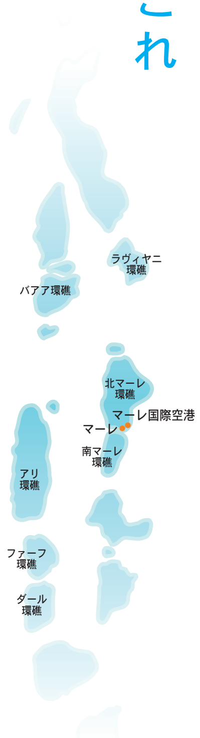
乾期のモルディブは晴天の日が続き、透明度も高い。美しいリーフを見渡すことができる

ディナーには少しドレスアップして、ちょっぴり贅沢な時間を味わう(ベリガンドゥ アイランド)



インド洋の固有種、コラーレバタフライフィッシュ(上)
モルディブの固有種ドラキュラゴビー(左上)
青い唇がキュートなシテンヤッコ(左下)

楽園の小道具(ヒルトン モルディブ)



島々の花環についてのあれこれ

モルディブの正式名称はモルディブ共和国。1887年にイギリスの保護領となり、1965年に独立、1968年11月11日に共和国となった。

インドの西南に約675km、赤道より少し北に位置しており、南北に約753km、東西に118kmの広い範囲にアトールと呼ばれるサンゴで形成された環礁が26ある。

上空から青い海に描かれた円形の環礁を眺めているとモルディブの名の由来が古代インドの言語、サンスクリット語の“Malodheep”「島々の花輪」であることに納得する。

その環礁の中に点在している島の数は1200余島。人が住んでいる島はおよそ200島。その他にリゾートの島、漁民の島、無人島、養鶏の島などがある。島の大半は、海抜わずか1～2mの砂州に椰子の木が生えてできあがった小さな島で、大きさはそれぞれ100m^2～2km^2ほどである。無人島には潮の干満により水面下に沈んでしまう島もあるので正確な数を把握することは難しい。リゾートの島は現在約80島ほどあり、毎年2，3島ずつオープンしている。基本的に1島1リゾートのためプライベートな感覚で滞在でき、また経営もインド、ドイツ、フランス、イタリア、日本などとその島によって異なり、様々な雰囲気を楽しむことができる。

モルディブは高温多湿の熱帯性で平均気温は26～33度。季節は12月～5月までの乾季、6月～11月までの雨季と２つのモンスーンの影響によって異なる。乾季はさわやかな晴天が続き雨はほとんど降らない。雨季も基本的には晴天だが１日に１～２回のスコールに見舞われることがある。水温は年間を通じて25～28度と平均しており、季節に関係なく海で遊ぶことができる。

Kagii Yasuaki in Maldives

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます